
幼児期における音楽教育

—歌唱を通して豊かな感受性と表現力を育てる試み—

郡山女子大学附属高等学校音楽科非常勤講師
平野 強子

I. はじめに

これまで幼児教育のひとつとして、音楽を通して学び感じ取ることが、その成長過程に著しく影響を与える程、重要であることを実践を続けながら指導してきた。今回それら指導経過を整理して、これからの研究により深く生かしたいと思う。

幼児教育の現場において、幼児の自己表現力や豊かな感性を引き出して育てる為に、音楽表現の実践や歌唱体験が子供達を成長させることは明確である。また、子供達の興味や発達にあわせて基礎知識やリズム、音楽の専門的アプローチを重ねて指導していくことがより重要だと思われる。本研究では指導の実践と音楽的要素を捉える視点や個々の取り組む意識を分析して課題を検討し、保育者としての指導計画立案、現状に即した音楽表現に関する教育につなげることを目的とする。

II. 幼児が本来持っている能力・可能性を引き出す

子供達の置かれている様々な環境の違いによって、「音」や「声」を捉える意識は多様である。幼児が普段生活している環境の住宅条件や家族構成により、「声を出す」「歌う」という作業が大変躊躇する行為にもなり得る。おとなしくて聞き分けの良い子供にありがちで、一度外に向けて心を開放してあげること、子供なりに持っている、大きな声を出すことに対する恐怖感や罪悪感にも似た感情を解きほぐしながら、指導する必要性が大きいと、筆者は考える。その為にも、音環境を意識して子供と共に「聴く」ことから始めて体内・体外的に「音環境」を作り、幼児の身体能力(声域・肺活量など)を考慮して指導に取りかかるべきである。それによって、子供にとっての音環境の大切さに保育者も気付くことが出来るはずだ(岡本・吉永 2013)。加えて「あくび」や「くしゃみ」「げっぷ」「おなら」などの音の個々の違いや自然の音(鳥の鳴き声・水の流れる音・雨・雷などの天気の違いや移り変わりの音など)を発見や観察を通して気付くことにより、やがて「絵本を読む」「自分を表現する」「想像力を育てる」という段階に繋がる『音教育』である。

わらべ歌や日本古来の叙情歌には、現代社会では触れる機会の少ない物や生活習慣の変化に伴い、理解させるのが困難な場合も多い。出来るだけ「絵」や「写真」等を使用しながらその存在を説明して、子供に想像させて歌わせることが大切であろう。擬音語や擬態語等の語感、個々の反応を見極めながら抽出練習をすることで、指導者との共感も育つと思われる。日本語に、長短・強弱・高低が加わって、旋律が生まれていくことを語彙の

少ない幼児の段階から触れさせてあげることこそ大切であろう。たとえ正確な音程でなくても、詩のコトバが「音」(歌)として歌われ、子供が自らの「声」で表現する事を実践の第一義とする(66の会 1992)。これらの歌は音楽を学ぶというより、遊びと密接に関わりうる所で、純粋に「音」を楽しませてあげたい。子供の成長過程と音楽との関係は、まず運動(リズム)から始まり、それにプリミティブな限度表現が結びつくことによって音楽の基本的な形体に近づくのである。(園部・山住 1962)初期段階では、リズムや拍子、メロディー、色彩の調和、反復、あるいは意味の無い自己の活動を用いるべきである。(Steiner・坂野・落合 1986)そこから、手を叩くリズムの模倣や簡単な打楽器を打つこと、母音の連続を发声したり、動物の鳴き声をまねて、強弱やそれぞれのニュアンスを工夫させて指導しながらリトミックに導入することも可能になる。

「弾き歌い」指導における課題は、幼児・児童・指導者両者が「弾くこと」と「歌うこと」のどちらに苦手意識があるかによって異なる。弾く行為は器乐的技術を要求されがちであり、歌う作業は自己の内的な物を適切な呼吸を伴い表現する作業である。特に歌うことについて述べるならば、歌うことには技術習得だけでは解決しない「持った声」をコントロールする意識が発生してくる。早期教育によって苦手意識を打破して、本来「なんの為に歌うのか」を問いながら指導していくことが臨まれる。能力に個人差があるのは当然だが、4・5歳児の幼児向け教材から11歳6年生の教科書教材に至るまで音域上(最高音、最低音、平均音)何ら差がなかった。だからこそ、たとえ地声で正確にピッチを合せられなくても、ピアノで演奏している旋律の調性に当てはまらなくても、やがて年齢を増して成長していく課程で十分取り返せることを念頭に置きたい。後々、「心のキズ」として強い羞恥心として残ることの無いようにデリケートに配慮したいものである(村尾 1995)。声楽的に専門に訓練され、技術的に高いレベルでの演奏の鑑賞体験を与えても、受け止める側(特に幼児・児童の理解能力との温度差がある場合)には、残念ながら感性にまで届かない場合もある。だからこそ崇高な「声」の存在を不安がらずに追求したいものだ。肉声の持つ力というのは、人間の普段意識出来ないような臓腑というか、内的な物と繋がっているからこそ「歌の力」になり得る(谷川 2002)。裏声を用いたり、キーを動かして調整する、強弱を変えて声を出す、吐く息を工夫させるなどの様々な試みをして、音楽の楽しさや喜びを共鳴・共感させてあげられるように、幼児達個々の本来持っている能力・可能性を引き出して育てることこそ本来の幼児教育だと、保育者自身が忘れてはならない。

Ⅲ. 事例

方法は以下のとおりに実施した。

対象者：4歳～5歳(事例1・3) 2歳8ヶ月～6歳(事例2)

毎週1回30分～60分(導入期から一人でレッスンが出来るまでの段階を見極める)

レッスン場所：筆者の自宅に赴いて貰う場合(事例2・3・)

幼児の自宅に行く場合(事例!)

使用教材：ピアノ(ピアノ教則本バイエル.. 事例②・③) メトード・ローズ.. 事例① バーナム・ピアノテクニック1)

子供のためのソルフェージュ1a・1b

カード(リズム・音符・休符・音を覚えるための楽譜カード... 自作)
カスタネット2種類 タンバリン
幼児曲・抒情歌等の楽譜
五線紙ノート(1段から12段まで段階に合わせて用意する)

1. Aくんの事例

男児 4歳~5歳まで 当時 北西ドイツ在住 日本人

・2歳年上の姉のレッスンを見ていて興味を持ち始める。当初、じっとして椅子に座っていることが苦手だったことから、実際にピアノを弾く時間より、これらのレッスン時間を多く体験させた。

・リズム打ちのまねっこ、カードで実音を当てっこしながら歌う、楽譜の階名練習を喋ったり、歌ったりの繰り返し練習、音にあわせて身体を動かす、5線ノートに音を歌いながら音符を書く。《譜1》

- ・歌唱曲 「ふしぎなポケット」渡辺茂作曲 「汽車ポッポ」草川信作曲
「証城寺の狸囃子」中山晋平作曲
ドイツ 季節の行事の中の幼児曲 他

[考察]元気な子供で毎回沢山おしゃべりをしたくて待っていてくれた。ピアノがすらすら弾けるようになることよりも、興味の持てるリズムを連打するのが楽しいようで、何度も繰り返すことを喜んで学んだ。普段ドイツ人の幼稚園に通っていた為日本語の説明や発音が不慣れだったので、「汽車..」や「証城寺..」は擬音語・擬態語を大きな声で歌っているうちに上手にスラスラ発音出来るようになった。また、日本のお爺ちゃんのお家に一時帰国した折、披露したらとても褒めて貰ったと、得意になって報告してくれた。ドイツ語の曲は楽譜を入手しないと筆者が指導できず、「これ知らないの?」と問われたり、耳で見事にヒアリングしたドイツ語の発音と比較して、苦笑することが度々あった。日本の幼児教育とドイツの教育現場との比較も出来て、沢山のことを共に学ぶことが出来た。

2. Bちゃん事例

女児 2歳8ヶ月~6歳

・まだ幼く家族以外の大人と話すことに慣れていない為、不安感が大きかったので、目を閉じて「音」を聴くことから始める。(生活環境の様々な音を聴いて想像をさせる。) 聞こえてきた音の判断:鳥の鳴き声・車の音・風の音・電気(暖房)の音

人の「声」..自分の声と筆者の声との比較 単音を強弱の変化を試みて歌う

ピアノで単音を強弱を工夫して弾く ペダルを踏んで単音を弾く スタッカートで弾く音(歌)のまねっこ 手でリズムを叩く《譜2》・その模倣

・ピアノで単音を弾きながら歌う 2回・3回の連続の後に休符を身体を動かして感得する 右手が音符、左手が休符の模倣練習「ネコ」「イヌ」など2音節の動物・3音節の動物や名前を探す言葉遊びをして、その鳴き声を音の高低を付けてまねる《譜3》

- ・五線ノートにC音とG音の全音符を最初から書いておき、どちらが聞こえたか塗りつぶ

譜1

タン タン タン タン ター ター

♪は手を打つ
♮は手をひらく

譜2

タン タン タン タン タン タン
右 右 左 左 右 右 左 左

譜3

ニヤン ニヤン ニヤン ニヤン ニヤン
ワン ワン ワン ワン ワン

譜4

聴こえた方をぬりつぶす

譜5

譜7

譜6

だんす 子お〜 ○○○ちゃん!

○○○ちゃん おどろかしめだんすも どろま

あすきだ

ね ほら!

す作業をして最初の聴音を試みる。《譜4》

・点線をなぞって お絵かきをする。その間、筆者が歌いながらピアノを弾いて音が止まるまで作業を終えさせるようにして、集中力と達成意欲を促す。《譜5》

・「おつかいありさん」團伊玖磨作曲 を 調性を4種に分けて歌う。調が変わることで、

ありさんのキャラクターが変わることを想像させる。自由におしゃべりさせて、高い音と自分の声との違和感を最小限に抑える。《譜6》

・歌唱曲 「ぶんぶんぶん」 外国曲 「やぎさんゆうびん」 團伊玖磨作曲

「山の音楽家」 ドイツ民謡 「ふしぎなポケット」 渡辺茂作曲

「あめふりくまのこ」湯山昭作曲 「一年生になったら」山本直純作曲 他

[考察]おりこうさんのお嬢さんで、どの作業も真面目に取り組み、高い意識で発見と反応が見られた。C音とG音のあてっこの作業を、一度お迎えにきたお父さんと一緒にやった

時の、自信のある高揚した彼女の「お父さんに分かるの？」という自慢顔は、とても子供らしくて今でも忘れられない。だが、頑張ろうとする余りに、きちんと思うように出来なかった時の不安感を払拭してあげられなかったことも数度あった。(特に5歳後半・入学の準備を始めた頃)彼女は聴力・読譜力・記譜力に秀でて、歌唱に少し不安感がみられた。そこで、筆者の妹との幼児体験を話して、人は色々な声を持っていること、歌は自分の為に歌うこと、「声」という楽器は世界中に一つしかないことを伝えた。調を変える・強弱をつける・「優しく」「元気に」「悲しく」「明るく」など感情表現を伴うと「声」も変化することを体得させた。おかげで、様々な経験を通して音楽が好きになってくれたようだ。

※筆者は幼少時から「歌うこと」が大好きで育つ。妹は生後1歳の時に重い気管支炎を患ってから、話し声が極端に低くなり声域が広がらずに成長した為、姉のように歌えず、幼くて状況を良く理解出来なかった姉は、調子はずれになる妹に心ない言葉をあびせてしまう。心にキズをおって思春期を過ごし、「歌う事」を完全拒否した妹は大学の心理学の授業で「何の為に歌うのか？」という本質を体験して、長い帳から解放された。その時点で筆者は、初めて事の重大さに気づき妹に心から詫びた経験を持つ。

3. Cくんの事例

男児 5歳～7歳 事例②の弟さん

・お姉ちゃんの「リズムノート」にある音符の並びを見て大変興味を持ったようで、自己表現のPRのように姉の楽譜にお絵かきをするようになった。心のシグナルだと解釈してレッスンを開始する。

・カードを使用して音を覚える その音を単音で歌う(速度を変えたり、強弱を自由に取って歌う カードを2・3枚並べて音の高低を意識して歌う)

・五線ノートに大小・色別を工夫させて書かせる..リズムカードを通して自分の理解出来た音符が増えていくことに、ことのほか喜びを表現する。彼にとって、羽の生えた♪とサクランボのように見える♩は、まるで宝物のようであった。

・身体を動かして休符を把握する 右手が音符、左手が休符のリズムをトントン叩く リズムの連続を模倣する 4小節に渡るリズム打ちの記憶聴音《譜7》

・聴き取った音型を記譜して、その場で視唱する C音を歌いG音を弾く(その逆)
..「CEGC」の上行音程を聴き取らせて歌わせようとしたら、「あ！迷子のお知らせの音だ」と言う。生活の中で興味を持っている音や、歌を「話してご覧!」という
と際限なくおしゃべり続き、彼の感受性の豊かさを痛感した。

・「歌うこと」に対して全く構えなく取り組み、様々な曲を楽しんで歌う事が出来た。
曲の雰囲気想像させて 即興で身体を動かして歌いながら表現する

歌唱曲 「トマト」 大中恩作曲 「たなばたさま」 下総暁一作曲
「チューリップ」 井上武士作曲 「ぶんぶんぶん」 外国曲
「こいのぼり」 小出浩平作曲 「大きな栗の木の下で」 作曲者不詳
「ぞうさん」 團伊玖磨作曲 「紅葉」 岡野貞一作曲 他

[考察] 姉弟で比較しても、全く違う反応が返ってきた。ピアノが弾けることをそれ程重要視していないのだろうか?と、思われたある日、「先生！ボク凄い発見したよ。何も言わないで黙って見てて!」とおもむろにピアノの前に座ると、「es des」と弾く。

即答出来ずにいた筆者に「お友達が弾いてたのをジ〜！と見てたんだ。誰にも教わらないで弾けたよ。凄いでしょ！」と言われて、やっと「ネコふんじやった」の冒頭部分だと気付く。その後彼のリクエストに応じて、指番号も気にせず弾ける所まで夢中になって時間も忘れてレッスンした。とにかくユニークな反応を連発するお子さんで、どんなメソッドにもないような反応が返って来るので、毎回筆者自身も発見があった。季節的にそぐわない時期に「おめでとうクリスマス」を英語の歌詞で大きな声で歌いながらメロディーを彼が弾いて、筆者が連弾して音楽体験をしたことがあった。「何だか、元気になるね。」と大笑いして彼の言う外国人の気分になって至福の時間を共有した。だが、自由に歌う・自由に楽しんで音と触れ合う..と優先してきたので、ピアノ奏法における技術向上が少なからず疎かになってしまった傾向がある。現在彼は中学生になり、その成長の課程でより音楽と共に生活するためにバレエ表現に熱中している。

VI. まとめ

この実践例は、少数単位による研究結果であるだけに複数の幼児を対象にする保育者としての研究計画を考察するならば、様々な問題提起があるだろう。

音楽的な表現活動を実践する長い時間の中で、本来子供達が持っているのびのびとした感性や、緩やかに遊びのポイントをみつけて「音楽」をとらえようとしている瞬間を、常に最優先出来ただろうか。指導者側の形式やより高い芸術性を目ざすがゆえの意識にあわせて、子供達の反応を見逃したりしなかっただろうか。反省を持ちながら研究してきた。それでも、保育環境における自然の発見や、音楽遊びの中で子供が独自に発見した創意工夫は、何よりも大きな収穫であった。また、幼児が後に成長していく課程で、普段の生活の中に個々の捉える「音楽」が形を変え、存在感を増して大切に重要な存在になっていることを確認できたことも筆者にとって幸せな報告であった。これからも変わらず、子供の身体的発達や得手・不得手な反応を素早く理解して、段階的に楽しませながら指導・教育して、より現場に即した研究を続けて行きたい。

文献

河合隼雄・阪田寛夫・谷川俊太郎・池田直樹(2002)『声の力 歌・語り・子ども』岩波書店、88-93 142-154.

村尾忠廣(1995)『調子外れを治す』音楽之友社、49-56 64-65

岡本拡子・吉永早苗(2013)「聴くことから始まる音環境への関心」『日本学校音楽教育実践学会紀要 17』.

66の会(おうち・やすゆき・こわた・たまみ・阪田寛夫・荘司武・関根榮一・鶴見正夫)(1992)『童謡曲集すてきな66のうた』カワイ出版.

桜井茂男・濱口佳和・向井隆代(2003)『子どものこころ 児童心理学入門』有斐閣 園部三郎.

Steiner, R・坂野雄二・落合幸子(1986)『教育術』みすず書房、98-101.

山住正己(1962)『日本の子どもの歌』岩波書店、184-185.